柏北部東地区出土の旧石器・縄文時代の石器３例

－木葉形薄型尖頭器・大型尖頭器・国府型ナイフ形石器の紹介と関連資料の検討－

橋　本　勝　雄

はじめに

柏市の西部を横断する常磐新線（「つくばエクスプレス」）はJR常磐線の混雑解消を目的として建設された東京・秋葉原駅と茨城・つくば駅間（58.3㎞）を45分で結ぶ鉄道で、平成17年８月24日に開業した。

この事業は、鉄道建設と沿線の土地区画整理事業が一体化しており、20の駅のうち、千葉県内では、「流山セントラルパーク駅」、「流山おおたかの森駅」、「柏の葉キャンパス駅」、「柏たなか駅」の４つの駅とその周辺（約919ha）で沿線地域の開発が行われることとなった。

このうち柏市の「柏の葉キャンパス駅」と「柏たなか駅」の周辺は、それぞれ「柏北部中央地区」と「柏北部東地区」と称されている。

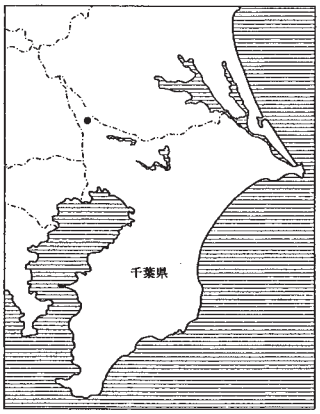
今回紹介する柏北部東地区は、柏たなか駅とその周辺の船戸地区、小青田地区、大室地区が該当する。事業面積は約128haである。

発掘調査は、公益財団法人千葉県教育振興財団（旧・財団法人千葉県文化財センター）によって、平成10年度から実施され現在も継続中である。

図示したように本地区には小山台、原畑、矢船Ⅰ、矢船Ⅱ、富士見、大松、駒形、花前Ⅰ、花前Ⅱ、花前Ⅲ、館林Ⅱの11か所の遺跡が所在する（第１図）。これらの遺跡は利根川から進入する支谷により開析され、東に向かい半島状に突出した地形を呈している。標高は10～18mであり、直下の低地との比高は最大10m程度である[1)]。

これらの遺跡からは旧石器時代～縄文時代の石器が発見されているが、整理作業中の資料のなかで、以下の石器３点は希少性が高く特に重要である。

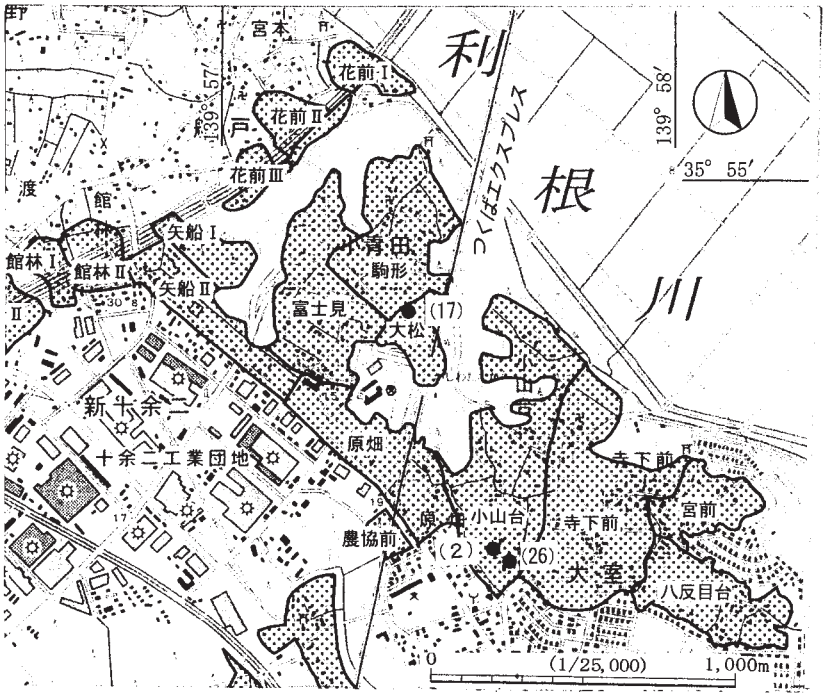
・資料１　小山台遺跡（26）出土　木葉形薄型尖頭器１点
・資料２　小山台遺跡（２）出土　大型尖頭器１点
・資料３　柏市大松遺跡（17）出土　国府型ナイフ形石器１点



柏北部東地区遺跡群

1	花前Ⅰ※	7	原畑
2	花前Ⅱ※	8	駒形
3	花前Ⅲ※	9	富士見
4	館林Ⅱ※	10	大松
5	矢船Ⅰ※	11	小山台
6	矢船Ⅱ		

※常磐自動車道建設に伴い一部調査済



第１図　柏北部東地区遺跡群関連遺跡分布図（新田2015を一部改変）

本稿では、かかる重要性に鑑み、報告書の刊行に先行して当該資料を資料化するとともに、関連資料の検討により、その歴史的位置づけを明らかにしたい。

２　資料の紹介（第２図）

第２図１は小山台遺跡（26）の縄文時代中期の竪穴住居跡から出土した、典型的な木葉形薄型尖頭器（凹基）である。本品の帰属時期は縄文草創期後半であるので、明らかに混在といえる。大きさは、長さ3.1㎝、幅1.4㎝、厚さ0.2㎝、重さ1.18ｇを測り、石材には東北頁岩（褐色系）が用いられている。器面は押圧剥離によって薄手・扁平に整形されており、表裏の稜上が部分的に研磨されている。先端部と右側縁下半部がガジリにより欠損している点が惜しまれる。

２は**小山台遺跡**（２）の発掘調査中に採集された東北頁岩製の大型尖頭器である。両面加工で、大きさは長さ17.3㎝、幅5.1㎝、厚さ1.1㎝、重さは98.94ｇを測る。両側縁は尖鋭で直線的である。断面は扁平な凸レンズ形を呈するが、薄手扁平で最大厚はほぼ中央部にある。上下両端の厚さが異なり、上端では0.5㎝、下端では0.2㎝となっている。網点で示したとおり上下両端に新たな損傷（ガジリ）がみられる。このような極めて薄造りで見事な調整技術をもつ大型尖頭器は全国的にも例がなく、まさに両面加工石器の白眉といえる。

この資料は、先の岩宿フォーラムでは、平面形態から旧石器時代終末期の大型尖頭器と評価された（岩宿博物館2014）。しかしながら、上下両端の欠損状況と厚さの違いを考慮すると、縄文前期にみられる有撮石器の可能性も、あながち否定できない。

３は**大松遺跡**（17）の調査時に発見された国府型ナイフ形石器である。縄文時代の遺物とともに竪穴住居跡から出土しているが、混在であることは言うまでもない。下半部は被熱により損傷している。大きさは現状で、長さ3.5㎝、幅1.8㎝、厚さ0.8㎝、重さ4.35ｇを測る。翼状剥片を素材としており、一側縁加工である。底面の打撃方向は主要剥離面とは直交している。刃部は、この種の石材では稀有なフェザーエンド（刃角50°）となっており、連続的な刃こぼれがみられる。石材はチョコレート色の東北頁岩である。

３　関連資料との比較検討（第３～第５図）

次に関連資料との比較検討により歴史的位置づけを考察する。ただし、この中で小山台遺跡（２）の東北頁岩製大型尖頭器については、既に述べたように、関東はもとより全国的にも例がなく時間的位置づけに苦慮しているのが現状である。したがって、今回は紹介にとどめ、詳細な検討は今後の資料の蓄積を待って判断せざるを得ない。

ついては、本稿では薄型尖頭器と国府型ナイフ形石器に焦点を絞り検討することとした。

（１）木葉形薄型尖頭器

木葉形薄型尖頭器は縄文草創期後半に出現する。形態は極めて薄手扁平であり、押圧剥離による器体の整形後、しばしば研磨により器面中央部の剥離面の高まり（稜）が除去され、平坦に整形されている。その頻度は約80％と極めて高率である。石材は東北頁岩を主とする。

関連遺跡の分布域は東北地方から中国地方であり、特に関東地方で頻出している。

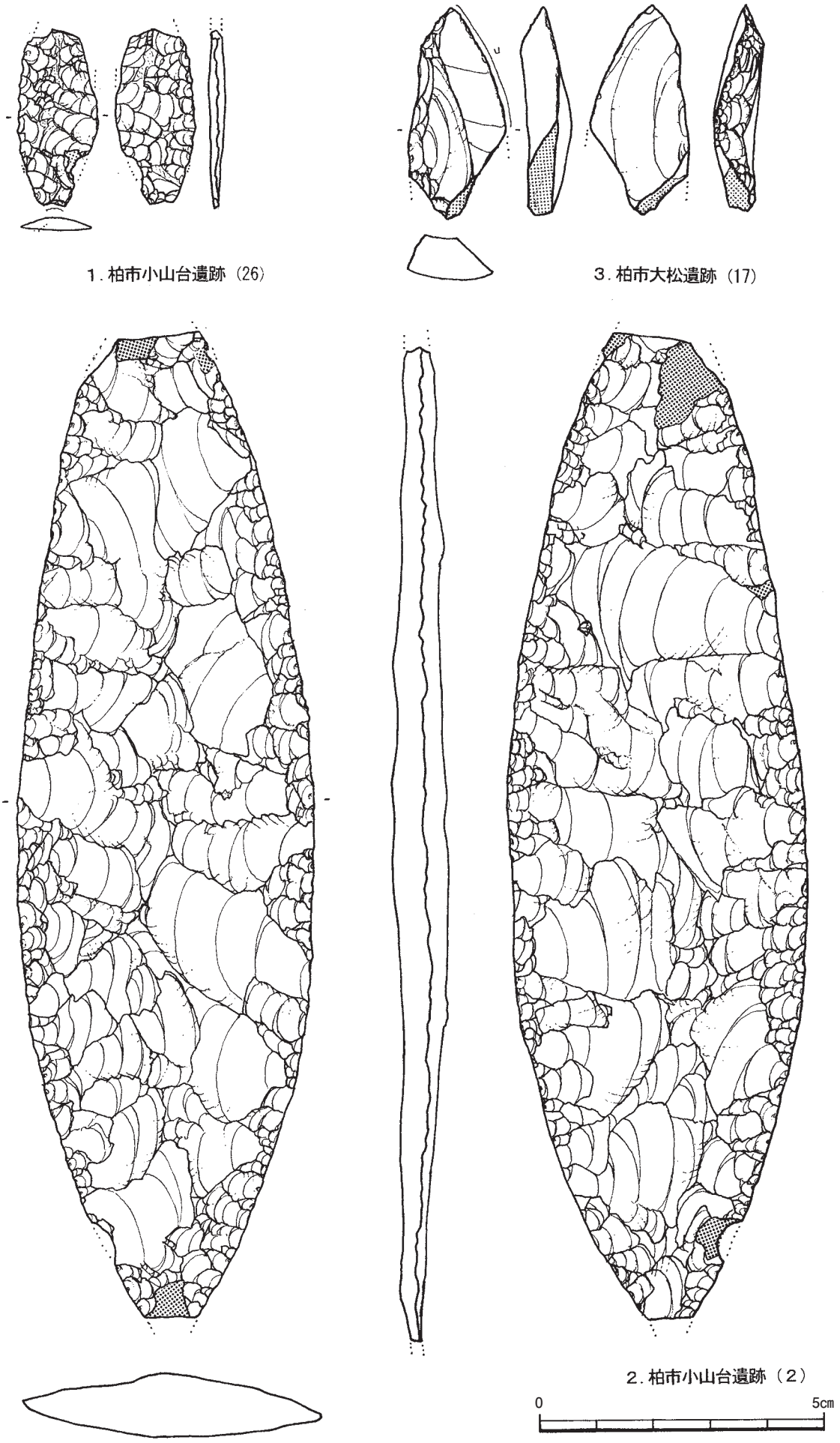
筆者の先の集計では、関東では41遺跡･46点を数え、関東以外からは８遺跡・15点（島根県宮ノ前遺跡、静岡県東野遺跡、新潟県壬遺跡・小瀬が沢洞穴、山形県日向洞穴・一ノ沢岩陰、岩手県大台野遺跡、秋田県岩瀬遺跡）の資料が出土していた（橋本2013・2014ａ・2014ｂ）。

その後、今回の小山台例を含め、５遺跡（５点）を確認したので、まずはこれらの資料を紹介しよう。

第３図２は**山形県寒河江市高瀬山遺跡**の東北頁岩製の典型例（長さ4.1㎝、幅1.6㎝、厚さ0.4㎝、重さ2.06ｇ）である。縄文時代中期末葉の遺物を主体とした性格不明の遺構（SX241）から出土した。研磨痕はなく先端部と一側縁がガジリによりわずかに欠損している。報文では、凸基有茎鏃で茎部が折損、と記載されていたが、実見の結果、基部は完存しており凹基であることが判明した。なお、この遺跡は最上川左岸の河岸段丘に立地しており、遺跡直下の河原では、今でも良質な東北頁岩が採取可能である。いわゆる原産地遺跡といえよう（今・大場・安部2012）。

３～６は関東の追加資料である。いずれも一括性に欠け、遺構外出土ないしは採集品である。

３は**群馬県渋川市白井北中道遺跡**の発掘資料（長さ3.0㎝、幅1.1㎝、厚さ0.3㎝、重さ0.9ｇ）である。報文では「槍先形尖頭器」とされている。側縁の一部にみられる損傷はガジリによるものであり、上下両端についても同様の可能性が高い。未実見のため器面の研磨の有無については不明である。石材には東北頁岩（褐色系）が用いられている（麻生1998）[2)]。



第２図　柏北部東地区遺跡群出土石器３例

４は**茨城県ひたちなか市孫目Ａ遺跡**の発掘資料（長さ2.2㎝、幅1.5㎝、厚さ0.3㎝、重さ1.11ｇ）である。打製で基部は凹基である。石材はメノウである。上半部は欠損しているが、ガジリの可能性がある。（大塚1999）

５は**茨城県笠間市野口池東遺跡**から採集された資料（長さ3.8㎝、幅1.5㎝、厚さ0.3㎝、重さ1.64ｇ）である。報文では「植刃」となっているが、技術・形態・材質等の諸特徴から木葉形薄型尖頭器に含めた。石材は灰色系の東北頁岩である。実見が叶わなかったため、上下両端の欠損状況や研磨の有無については不明である（川口2001）

６は**平塚市向原遺跡**の発掘資料（長さ2.9㎝、幅1.8㎝、厚さ0.3㎝、重さ1.41㎝）である。報文では「有舌尖頭器」とされている。石材は東北頁岩製（灰褐色）で表裏中央の稜上には線状に研磨痕がみられる。両端の欠損はガジリによる可能性が高い（中田ほか1982）

以上のように、小山台遺跡をはじめとした今回の資料は、関東一円の資料を一層充実させることとなった。

特に千葉県北西部と茨城県中部はこれまで遺跡分布が希薄な地域であり、分布の空白を埋める資料として貴重である。さらに、孫目Ａ遺跡出土のメノウ製の資料は木葉形薄型尖頭器としては初出であり資料的価値が高い。

それにしても、今回の高瀬山例は僥倖であった。関東の資料の大半は東北頁岩製で、しかも石器製作の痕跡をとどめておらず、完成品として搬入されたことは確実であるが、これまで石材産地の東北地方ではわずか４例にすぎなかった。その意味で、この資料は東北地方の貴重な出土例であり、かつ石材産地近傍の製作遺跡である点に意義がある。

（２）国府型ナイフ形石器（第３図）

関東では、主として南関東の相模野台地、武蔵野台地、大宮台地及び下総台地に関連遺跡が分布し、北関東では二三の事例にとどまる。微視的には、大宮台地の西縁および武蔵野台地東部の古利根川（荒川）沿いに集中する。

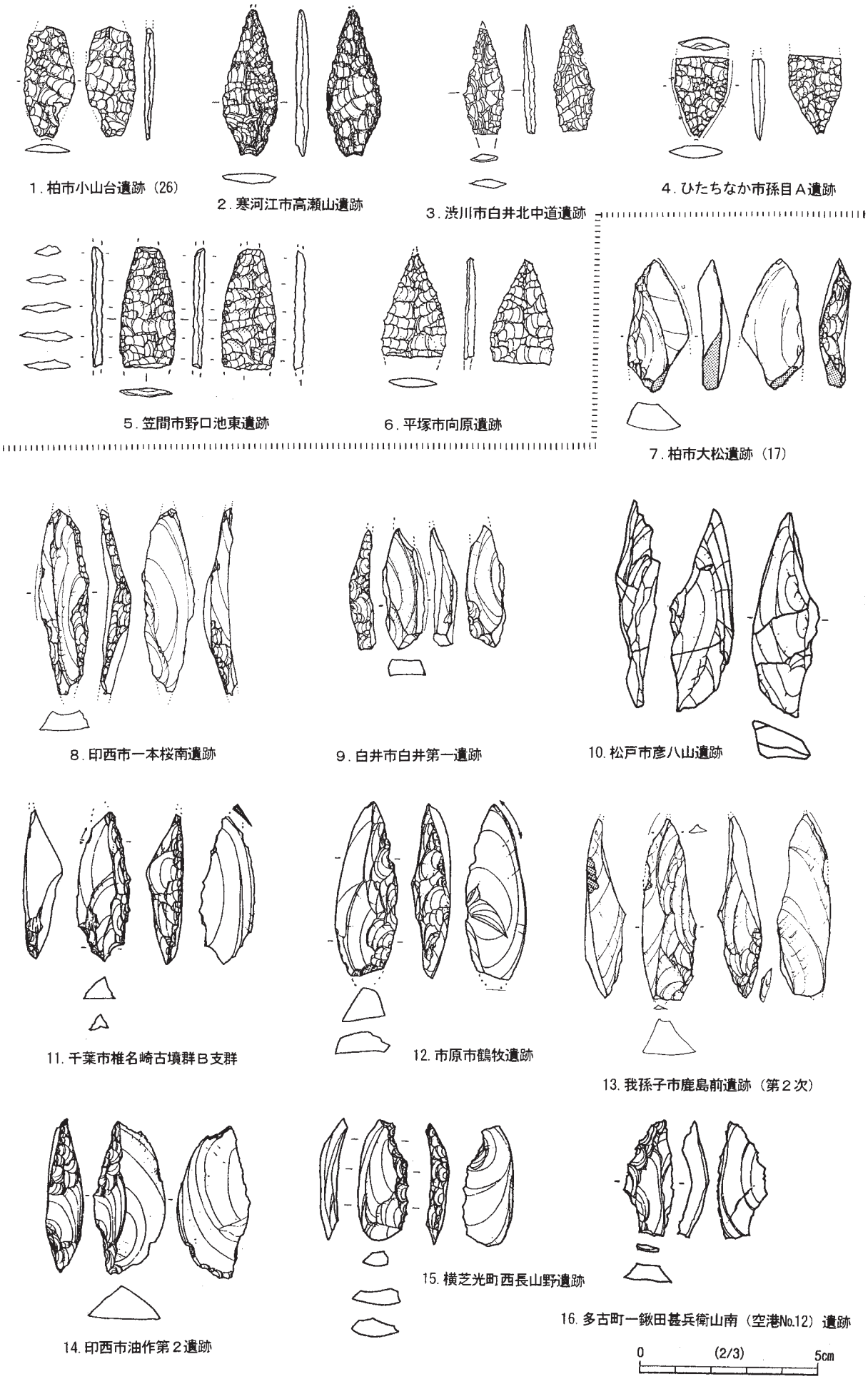
県内における国府型ナイフ形石器関連の資料としては、これまで印西市一本桜南遺跡（雨宮・落合1998）、松戸市彦八山遺跡（田村・小林1987）、千葉市椎名崎古墳群Ｂ支群（白井ほか2006）、市原市鶴牧遺跡（田島2010）、我孫子市鹿島前遺跡（石田1979）、印西市油作第２遺跡（村山ほか1985）、山武郡横芝光町西長山野遺跡（太田・矢本1992）、香取郡多古町一鍬田甚兵衛山南（空港№12）遺跡（西口・遠藤2005）が報じられている。ただし、この中には疑問視されるものも含まれている。

第３図８は**印西市一本桜南遺跡第11ブロック**（長さ5.2㎝、幅1.4㎝、厚さ0.6㎝、重さ4.5ｇ・刃角55°）から角錐状石器とともに出土した二側縁加工のナイフ形石器（長さ5.2㎝、幅1.4㎝、厚さ0.6㎝、重さ4.5ｇで刃角は55°）である。細身で断面は台形を呈する。出土層位は立川ロームⅤ層である。背面にみられる底面の剥離方向は主要剥離面と同一で、底面以外の剥離面は1枚である。主要剥離面側のバルブは突出している。刃部は主要剥離面に向かってやや内湾し、上端部はヒンジフラクチュア（「ヒンジ」）を呈している。上下両端は若干欠損し、刃部には刃こぼれがみられる。石材は節理面がない良質な青黒いチャートであり、同一母岩のナイフ形石器１点とともに完成品として遺跡内に搬入されている。

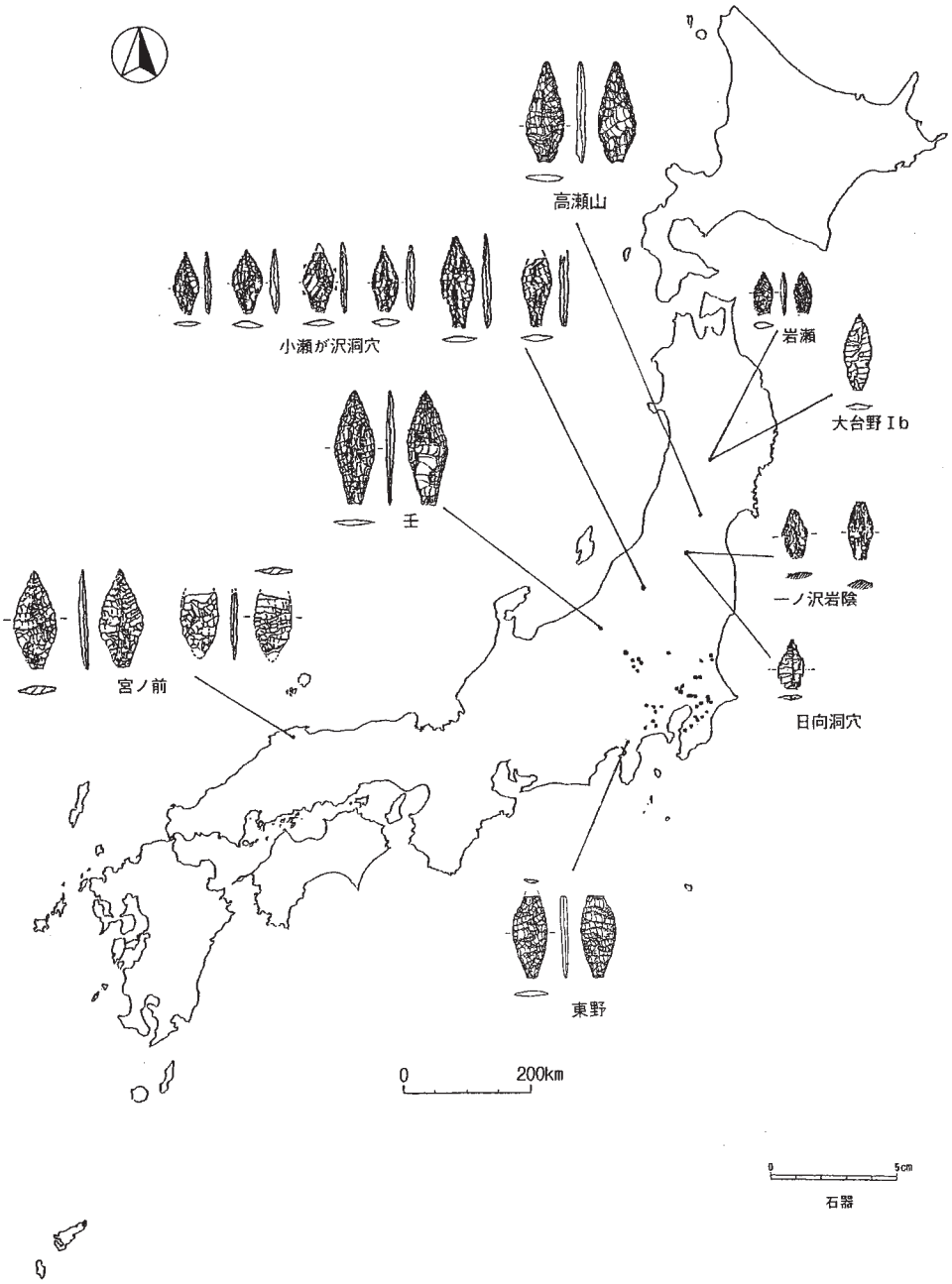
９は、**白井市白井第一遺跡022ブロック**出土の二側縁加工の細身のナイフ形石器（長さ3.3㎝、幅1.2㎝、厚さ0.4㎝・刃角70°）である。出土層位は立川ロームⅣ下・Ⅴ層である。底面の剥離方向は主要剥離面と同一方向で、底面以外の剥離面は２枚である。左側縁の刃潰し加工は対向調整剥離で、刃部は主要剥離面に向かって内湾している。上端が欠損しており、刃部には刃こぼれがみられる。石材は白滝頁岩で単独母岩である。

10は**松戸市彦八山遺跡４ブロック**から出土した有底横長剥片３点の接合資料である。出土層位は立川ロームⅤ層下部である。ナイフ形石器ではないので、参考例として提示した。接合状態で長さ5.7㎝、幅2.0㎝、厚さ1.2㎝、重さ7.3ｇ、刃角は60°～70°を測る。底面にはポジティブバルブ（コーン）がみとめられ、素材が盤状剥片であることは明らかである。底面の剥離方向は主要剥離面と直交し、背面側には底面以外に１～２枚の剥離面がある。刃部は主要剥離面に向かって内湾している。石材は黒色頁岩で角錐状石器が共伴する。

11は**千葉市椎名崎古墳群Ｂ支群第５文化層第18ブロック**出土の二側縁加工のナイフ形石器（長さ4.2㎝、幅1.4㎝、厚さ1.0㎝、重さ4.54ｇ）である。立川ロームⅢ層を出土層準とする。刃部の角度が45°であるのに対して、刃潰し加工の角度は70°で断面形は角錐状石器に近い。底面の剥離方向は主要剥離面と同一方向であり、底面以外の剥離面は１枚である。主要剥離面側のバルブは刃潰し加工により除去されている。先端



第３図　木葉形薄型尖頭器の追加資料（１～６）・千葉県内の国府型ナイフ形石器関連資料（７～16）



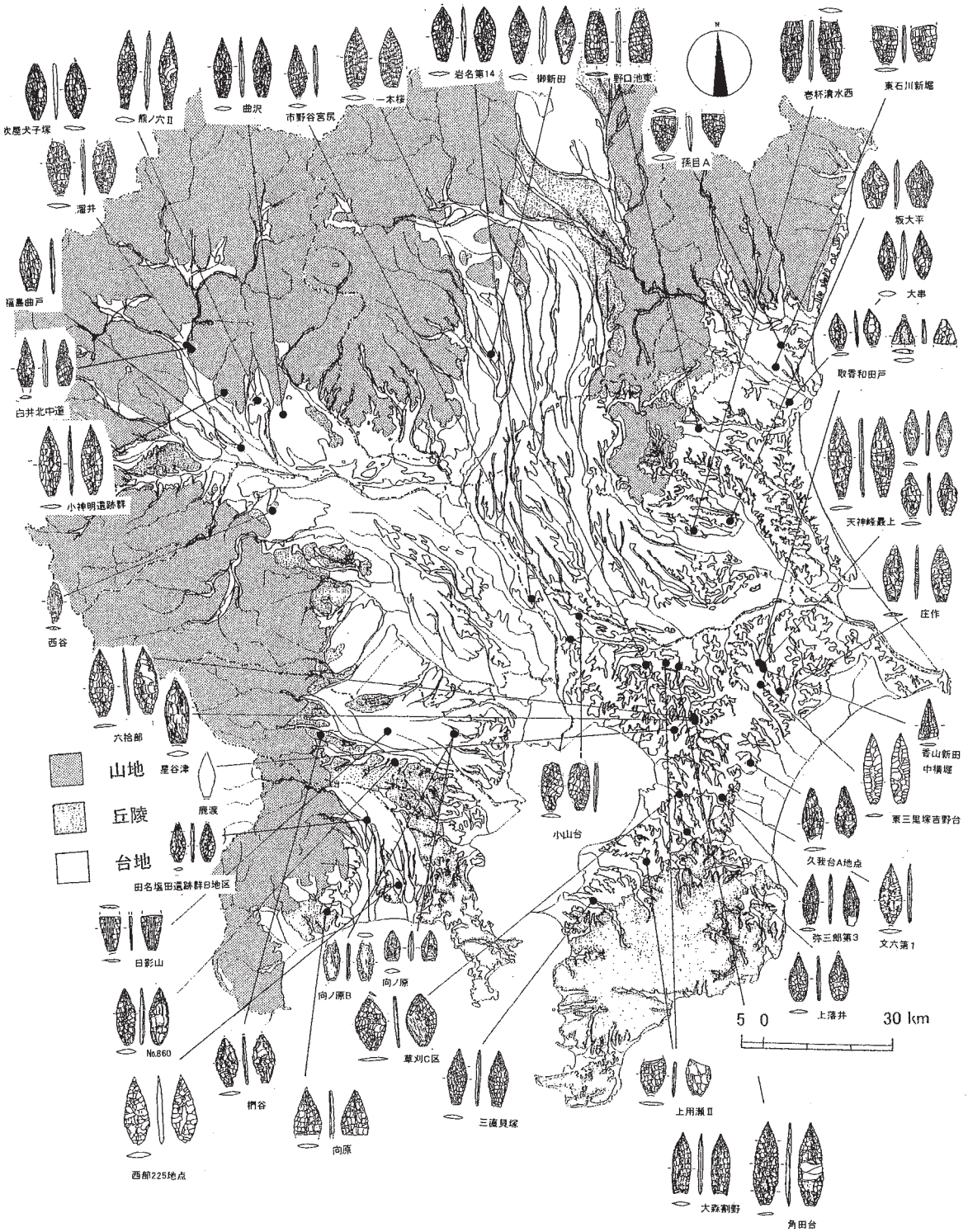
第４図　木葉形薄型尖頭器の関連遺跡分布図（全国） 橋本2014を一部改変

がガジリによって欠損している。刃部はヒンジフラクチュアを呈し、刃先には部分的に刃こぼれがみられる。石材はチョコレート色の東北頁岩で大松例に類似している。同一母岩の資料として他に剥片２点がある。角錐状石器の共伴はない。

12は**市原市鶴牧遺跡**の一側縁加工のナイフ形石器（長さ4.8cm、幅1.7cm、厚さ1.0cm、重さ6.82ｇ・刃角55°）である。ブロック外単独出土で、出土層位は立川ロームⅢ～Ⅴ層である。底面の剥離方向は主要剥離面と斜めに交差し、底面以外の背面側剥離面は１枚である。主要剥離面側のバルブはやや突出しており、下端部にはガジリがみられる。刃部の中央部はヒンジのため使用に堪えないが、上下の比較的鋭利な（内湾気味の）縁辺には刃こぼれがみられる。石材は流紋岩質凝灰岩で単独母岩である。角錐状石器はない。

13～16は末端に底面を有する横長剥片（以下「有底横長剥片」）等を素材としたナイフ形石器である。これらは国府型として、これまで紹介されてきたが、真正の資料とは到底言い難い。ついては類似の資料として参考に供する。

13は**我孫子市鹿島前遺跡（第２次調査）**出土の一側縁加工のナイフ形石器（長さ5.0cm、幅1.5cm、厚さ0.9



第５図　木葉形薄型尖頭器の関連遺跡分布図（関東） 橋本2014を一部改変

cm、重さ6.0ｇ・刃角55°）である。未報告の資料であり出土状態は不明である。有底横長剥片を素材としており基部付近に部分加工が施されている。刃部はフェザーエンドで部分的に刃こぼれがみられ、その一部がガジリによって欠損している。石材は東北頁岩である[3)]。

14は**印西市油作第２遺跡**出土のファーストフレイクを素材とした一側縁加工のナイフ形石器（長さ4.2cm、幅1.8cm、厚さ1.2cm・刃角45°）である。単独出土で出土層位も不明である。完形品で刃部の中央部はヒンジを呈するが、比較鋭利なそれ以外の縁辺には刃こぼれがみられる。石材は東北頁岩である。

15は**横芝光町西長山野遺跡第１文化層第３ブロック**出土の有底横長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器（長さ3.3cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ2.49ｇ）である。立川ロームⅣ下・Ⅴ層を出土層準とする。刃

角は55°で刃潰し角度は75°を測る。主要剥離面のバルブは突出し、刃部はややヒンジである。石材は珪質流紋岩であり、ブロック内には同一母岩の資料として他にナイフ形石器１点、剥片５点及び砕片２点がある。

16は**多古町一鍬田甚兵衛山南（空港№12）遺跡第９地点**出土の有底横長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器（長さ3.2㎝、幅1.4㎝、厚さ0.6㎝、重さ2.69ｇ）である。出土層準は立川ロームⅦ層下部であり、国府型との隔たりは大きい。刃角は65°で刃潰し角度は65°を測る。刃部はややヒンジである。石材は白滝頁岩で単独母岩である。

以上のように、県内の関連資料の多くは、本来の国府型ナイフ形石器というよりも「国府型ナイフ形石器類似」の横長剥片素材のナイフ形石器と考えられる。また、大枠では、南関東的な立川ロームⅣ下・Ⅴ層の石器群で角錐状石器や切出形ナイフ形石器の共伴が一般的である。

石材は、東北頁岩が最も多く、チャート、黒色頁岩、珪質流紋岩・流紋岩質凝灰岩、白滝頁岩等多岐にわたる。県内の関連資料は基本的に搬入品であるが、大松例をはじめとした遠隔地石材の東北頁岩はそのあらわれといえよう。

ちなみに関東全体の岩種は頁岩、珪質頁岩、硬質頁岩、チャート、黒曜石（信州・柏峠）、黒色頁岩、黒色安山岩、ガラス質黒色安山岩、凝灰岩、玉髄、ホルンフェルスである。総じて地域性を如実に物語っており、古利根川流域の大宮台地～武蔵野台地東部では黒色頁岩と黒色安山岩が主体となっており、信州系黒曜石やチャートがこれに加わる。さらに相模野台地では在地の凝灰岩、箱根産ガラス質黒色安山岩が双璧であり、畑宿・柏峠産黒曜石が若干見られる。全国的には安山岩系との結び付きが強いことが指摘されているが、どうやら関東は異なるようである。

技術的特徴としては、大半の素材にヒンジフラクチュアがみられる。このことは、西日本からもたらされた国府型ナイフ形石器の素材生産に関わる剥離技術の適用がいかに困難であったかを窺わせる。

このことに関しては、会田容弘の「良質で十分な大きさの石材が供給されにくい関東地方では、国府型ナイフの素材となる翼状剥片が常時剥離できるような石材環境にはなかった。それが国府型ナイフの希薄な分布の原因である。」との見解が関連づけられる（会田1994）。このような石器石材の種類・大きさと剥片生産技術のかねあいを重視する会田見解は、基本的に妥当であり、多数の接合資料で知られる群馬県上白井西伊熊遺跡（大西2010）を含め関東全域に適用可能である[4)]。

おわりに

木葉形薄型尖頭器、東北頁岩製大型尖頭器、及び国府型ナイフ形石器の資料紹介に加えて関連資料との比較検討を行った。

紙数の関係で語り尽くせなかったことも多々あるが、今回の資料化が今後の研究の一助となれば幸いである。

なお、関東の国府型ナイフ形石器については別稿にて論述する予定であるので、詳細については、そちらを参照願いたい。

謝辞

執筆に当たり以下の方々・機関に御指導・御協力を賜りました。末筆ながら謹んで御礼申し上げます。

我孫子市教育委員会、千葉県立房総のむら、千葉県教育委員会、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社、神奈川県埋蔵文化財センター、鈴木素行、川口武彦、津島秀章、島立桂、山口典子、山岡磨由子（順不同・敬称略）。

注

1）花前Ⅰ～Ⅲ遺跡、館林Ⅱ遺跡、矢船Ⅰ遺跡については、常磐自動車道建設に伴いその一部が発掘調査済である。

2）公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団・津島秀章氏から教示。

3）我孫子市教育委員会所蔵。

4）上白井西伊熊例は黒色安山岩を用材とした瀬戸内技法の関連資料であるが、縦折れによる失敗品が大半であり、目的剥片の生産性は異常に低い。また接合率が高く原石にまで復元可能であるが、裏を返せば、それは失敗品のため他所に搬出されず、その場に遺棄されたことによる。

遺跡近傍に豊富に産する黒色安山岩は、比較的大型で良質であるが、こと翼状剥片の生産に限っては、いかに不向きであったかを、この事例は物語っていよう。

補注：本稿を草するあたり関係諸機関の特段の御配慮により、ひたちなか市孫目Ａ遺跡の木葉形薄型尖頭器と印西市一本桜南遺跡・白井市白井第一遺跡のナイフ形石器については再実測、未発表の鹿島前遺跡（我孫子市教育委員会所蔵）のナイフ形石器については、新たに実測を行ったことを付記しておく。

引用参考文献

会田容弘　1994 「東日本の「国府系石器群」を中心とする石器群の石器組成比較」『瀬戸内技法とその時代』 pp.153-162 中・四国旧石器文化談話会

麻生敏隆　1998 『白井遺跡群－縄文時代編－』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

雨宮龍太郎・落合章雄　1998 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸⅡ－白井町一本桜南遺跡－』 財団法人 千葉県文化財センター

石田守一　1979 『鹿島前遺跡第２次発掘調査概報』 我孫子市教育委員会

岩宿博物館　2011 『第52回企画展　岩宿時代の東西交流－瀬戸内技法と上白井西伊熊遺跡－』

岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会　2011 『上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法　予稿集』

岩宿博物館　2014 『第58回企画展　石器が語る時代の変化』

大塚雅昭　1999 『笠松運動公園拡張事業地内埋蔵文化財調査報告書　孫目Ａ遺跡・孫目古墳群（１号墳)』 財団法人茨城県教育財団

太田文雄・矢本節朗　1992 『横芝町上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡』 財団法人千葉県文化財センター

大西雅広　2010『上白井西伊熊遺跡－旧石器時代編－』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

川口武彦　2001「岩間町内発見の先土器時代・縄文時代草創期資料」『婆良岐考古学』第23集　pp.101－109　婆良岐考古学同人会

今正幸・大場正善・安部将平　2012 『高瀬山遺跡（HO）３期発掘調査報告書』 財団法人山形県埋蔵文化財センター

白井久美子ほか　2006 『東南部ニュータウン35　千葉市椎名崎古墳群Ｂ支群』 財団法人千葉県教育振興財団

鈴木定明　1978 「白井第一遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』 財団法人千葉県文化財センター

田島新　2010 『千原台ニュータウンＸＸⅣ－市原市鶴牧遺跡（下層）－』財団法人千葉県教育振興財団

田村隆・小林清隆　1987 『松戸市彦八山遺跡』財団法人千葉県文化財センター

中田英・服部実喜・佐々木藤雄ほか　1982 『向原遺跡　第1分冊』 神奈川県教育委員会

西口徹・遠藤治雄　2005 『成田国際空港埋蔵文化財調査報告書ＸＸＩ－多古町一鍬田甚兵衛山南（空港№12）遺跡－』 財団法人千葉県文化財センター

新田浩三　2015 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書８－柏市富士見遺跡・原畑遺跡・駒形遺跡－旧石器時代編－』 公益財団法人千葉県教育振興財団

橋本勝雄　2013 「縄文時代草創期の局部磨製尖頭器－「木葉形薄型尖頭器」の再検討－」『旧石器考古学』78　pp.45-61 旧石器文化談話会

橋本勝雄　2014ａ 「《研究ノート》木葉形薄型尖頭器の新例－その分布の広がり－」『研究連絡誌』第75号　pp.34-38　公益財団法人　千葉県教育振興財団

橋本勝雄　2014ｂ 「岩宿フォーラム 「本ノ木型尖頭器・木葉形薄型尖頭器、そして移行期の石器編年」『シンポジウム時代の変革と石器の変遷－旧石器から縄文石器へ－　予稿集』 pp.56-67　岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会

橋本勝雄　2015 「移行期における東北頁岩製石器群の関東への南下」『斬新考古』第３号　pp.31-33 （私設）北海道考古学研究所

麻柄一志　1984 「日本海沿岸地域における瀬戸内系石器群」『旧石器考古学』28　pp.19-35　旧石器文化談話会

麻柄一志　2003 「富山市御坊山遺跡出土の瀬戸内系石器群」『富山市考古資料館報』№40　pp.8-10

村山好文ほか 1985 『平賀』平賀遺跡群発掘調査会